

B. H. チェンバレンによる『古事記』英訳

— 「枕詞」の場合

タカハシ ノリコ
高橋 憲子

はじめに

枕詞は日本文学における韻文、特に和歌の修辞法の一つである。賀茂真淵は「冠辞」と名付けたが、現在はほとんど「枕詞」という名称が定着している。枕詞は和歌に慣用されているにもかかわらず、“文脈上意味を持たない”ことばが多く、特にW. G. アストン等の外国人からは異様な現象と捉えられてきた。アストンの「枕詞は正しく適用されるならば、全く有効なものかも知れない。しかし我々にとっては馬鹿げるとしか思えない方法で、本来の意味をゆがめながら意固地になってそれを使って喜んでいる日本の詩人達もいる」^①（川村ハツエ訳『日本文学史』1989）という批判は近世以後の枕詞の扱い方に関するものであろうが、枕詞が外国人にとって理解しにくいものであることは想像がつく。確かに個々の枕詞の発生には不明な点が多く、語義が不明なまま伝えられた枕詞も多い。

西郷信綱氏は「枕詞の詩学」(『文学』1985.2, Vol.53)の冒頭で万葉集328番歌「あをによし奈良の都は咲く花の薫^{にほ}ふがごとく今盛りなり」の「あをによし」を引用し、「初句の枕詞「あをによし」が奈良の都を一挙に呼び起こしてくる独特な力をもっていることは、恐らく誰しも認めざるをえまい」[下線高橋]と書き出す。西郷氏はその後で「あをによし」がなぜ、またいかに奈良にかかるかは不詳であると続けるのだが、外国人は最初の「恐らく誰しも認めざるをえまい」というところで首を傾げるのではないだろうか。つまり、西郷氏の言う枕詞の

持つ力のようなものを日本語を母国語としない人々が理解することは非常に難しいのではないか。その枕詞を西洋の言葉や詩歌の修辞法と比べながら、理解しようとした外国人がB. H. チェンバレンである。

B. H. チェンバレンは明治6年（1873）から30年以上日本に滞在し、その間の明治19年（1886）から健康上の理由で職を辞する明治23年（1890）まで東京帝国大学の日本語学教授を務めるなど、日本の英語教育に尽力している^②。また、『古事記』の英訳やアイヌ語や琉球語の研究でも知られる。チェンバレンは『古事記』の英訳書、*KO-JI-KI or "Records of Ancient Matters"*（1883）の序（"Introduction"）の「翻訳の方法の事」で「枕詞」の英訳について以下のように述べる。

本文中の歌におきては解釈かたきふし甚多く頗難語あり、…この枕詞の如きは其言詞を飾るまでにて戯^レれに似たるもありて其ノ意義明瞭ならざるもあれば下に記したる一例の外（一例とは沼名河媛命の歌ぬえくさのめにしあれはの枕詞）除きて訳さず、…^③（飯田永夫訳『日本上古史評論—原名英訳古事記』）

ところが、実際は多くの枕詞を英訳していて、訳さない枕詞についてもほとんど脚注で説明を加えている。さらに、『古事記』英訳以前の1877年1月、日本アジア協会に「枕詞と詞の遊戯」についての論文‘On the Use of “Pillow-Words” and Plays upon Words in Japanese Poetry’を提出している。そこでは、賀茂真淵の五分類説に対し、独自に四分類に設定するなど、チェンバレンの「枕詞」に対する関心はなみなみならぬものがある。

枕詞の実態については、現在でもわからないことが多く、ましてこれを英語に置き換えるなどということは至難の技であり、偏った解釈のまま英訳を行うよりは訳さない方が賢明であるとも言えそうである。ただ、我々日本人、特に古代文学を専攻するものにとってみれば、西郷氏でなくともそこに古代社会の

息づきのようなものが感じられることは否定できず、たとえ英訳であっても、古代の歌から枕詞をむげに切り捨てることはできない。当時の枕詞研究は『冠辞考』を著した賀茂真淵とそれを引き継ぐ真淵派が主流で、*KO-JI-KI* or “*Records of Ancient Matters*” の脚注に見る限り、チェンバレンの枕詞についての知識も、賀茂真淵（『冠辞考』とその続編）、本居宣長（『古事記伝』）、橘守部（『稜威言別』）の説を主に享受したものである。そのような意味においてはチェンバレンの枕詞研究も『冠辞考』の時点で留まっていると言えるが、彼が当時の枕詞研究をいかに吸収して英訳を行ったかを見て行きたいと思う。

1. チェンバレンの枕詞論

福井久蔵氏は『枕詞の研究と積義』「第一編 枕詞の研究史」^④の中でチェンバレンの枕詞研究について触れ、「氏は枕詞を以て意義なき詞となし」と述べているが、福井氏も参照しているチェンバレンの論文 ‘On the Use of “Pillow-Words” and Plays upon Words in Japanese Poetry’ でも修辞法としての枕詞を切捨てている訳ではない。この論文の中で、チェンバレンは日本の古典詩歌（‘the ancient poetry of Japan’）の修辞法の特徴として「枕詞（‘Pillow-Words’）」と「詞の遊戯（‘Plays upon Words’）」（序詞や掛詞の類）を挙げて、論文の主題を二つに分けて論を展開している。論文中で、チェンバレンは「枕詞」について、

それは言わば、次に続く意味を持つ言葉が頭に置くもので、それ自身実体のない (destitute of life) 言葉である。「冠辞」という語、すなわち「かんむりことば」、これは偉大な学者である賀茂真淵が「枕詞」より好んだ名称であるが、同じようにわかりやすい方法でこの語句の種類の性格を説明している。^⑤

[下線高橋]

と確かに現在では意味を持たない言葉になっていると説く。

次に、英語圏でよく使われる言葉として ‘the learned Professor (学識のある教授)’, ‘His Holiness the Pope (聖なるローマ法皇)’, ‘His Majesty the King (国王陛下)’ や ‘honourable members (尊敬に値する会員)’ の例を取り上げ、今は何の意味もなく習慣的に使用されているが、「これらはかつて何等かの意味を持っていた (But they ought to mean something, and not only so, but they did once mean something.)」^⑥と枕詞との接点を見つけようとする。そして、言葉の変遷によって枕詞が意味のわからない詞になる過程を説明する。その上で、『冠辞考』では枕詞を五種類^⑦に分類しているが、欧米人のためには四種に分けた方がわかりやすいとして以下のように分類する。

I. Descriptive words or phrases of the nature of an adjective or of a simile, that have suffered no phonetic change and are still employed in their original connection. (形容詞的または比喩的性質を持ち、音声上の変化を被らず、まだ本来のもの(原義)との関連で使用されている記述用語や記述句。)(例)なくこなす(泣く子なす(慕ふ))、さきくさの(三枝の(中))

II. Words, or phrases originally similar to those comprised in the first class, but now differing from them, in as much as letter-changes or application to words other than those they originally served to define have obscured their meaning. (I.と同様に形容詞的または比喩的性質を持つが、本来のもの(原義)が応用され転じて、本来の意味が曖昧になった言葉や句。)

(例) ひさかたの(天)、しきたへの(布・袖・枕)

III. Words or phrases alluding to some historical or mythological occurrence. (歴史的な事柄や神話上の出来事をほのめかす言葉や句。)

(例) はやびとの(薩摩)

IV. Punning words or phrases. (言葉の語呂合わせの語と句。)

(例) ころもでの(常陸)、ももたらず(八十隈)^⑧、かむかぜの(伊勢)^⑨

チェンバレンは、真淵を枕詞研究の最高の権威者と見なしているが、守部や

宣長の説も丹念に検証しており、それらの説を比較した上で、自説を確立しようとしている。確かに論文中に挙げられた「ひさかたの」や「ころもでの」の語源については現在でも諸説あり、その他の枕詞に関しても『冠辞考』の説明だけでは納得できなかったと思われる面もある。

2. 近世以降の枕詞研究

近世以来の枕詞の本質や起源に関する研究では、枕詞を「歌の調の足らはぬを整へるより起りて、かたへは詞を飾るもの」(『冠辞考』)とした真淵が画期的業績をあげている。本居宣長は「かしらをささふる物にこそあれ、さるはかしらのみにもあらず、すべて物のうきて、間のあきたる所をささふる物」(『玉勝間』八の巻)という見解を示している。鹿持雅澄は宣長を批判しつつ「此の枕詞といふものはたとふべきすぢなく、いふべき物もなく、あやしく貴きもの限り」(『枕詞解』(『万葉集古義』所収))と枕詞を絶対化している。真淵を枕詞研究の権威者と見なしていたチェンバレンはこうした環境の下で、外国人として何とかして枕詞を解釈しようとした。その後、福井久蔵氏は江戸時代から明治時代までの枕詞の研究史をまとめ、その中でチェンバレンの論文に触れ、

チャンバレン氏は^{ピロウワード・エンド・ブレイ・アボン・ワーズ}「枕詞及言語上の遊戯」と云る題で亜細亜協會雑誌に一論文を揚げ枕詞は意味のない詞であると云つて居る。此の説は私どもの考では採るに足らないものと思ふ。是は中世に至り枕詞の本義を失つて、唯だ古人の用例を踏襲した作ばかりを見て無造作に立てた説に過ぎないやうである」(『鬮枕詞の研究と釈義』序言)

と退けている。チェンバレンは枕詞を ‘it is a word, itself destitute of life, on which the succeeding significative word, as it were, rests its head. (それは言わば、次に続く意味を持つ言葉が頭に置くもので、それ自身実体のない (destitute^⑩ of life) 言葉である)’ と定義しているが、これが福井氏に「意味のない詞」と

解釈されたのか。ここで、福井氏による枕詞の定義を確認しておく。

枕詞は上下相関的の措辞にして、その上半は通常五音節より成り下半の為に従属の地位に立ちて、或はその修飾となり、或は声調を助け、以て読者に明晰深甚の印象を与え、或は匆の変化によりて心意を楽しましむるものなり。(『枕詞枕詞の研究と積義』47頁)

その上で、言語の特質として、「類似の音より転義し易きものは世々の歌人が好み用ふるより彌々発展し、否らざるものは自ら使用に限度あり、殊に音調の宜しからざるもの、歌人の趣味に合せざるものは忘却せられ終に亡ぶるに至る。」(同書、61頁)と枕詞の変成について述べている。

土橋寛氏は枕詞の概念を形作る特長的な属性として、1. 用法の固定性・社会性、2. 意味の非実質性、3. 語法の詠嘆性ないし前論理性(「ぬばたまの夜」(前論理的に結合されている枕詞)「神風の伊勢」「夏虫の蛾」(類語的枕詞)など)の三点をあげ、この三者は互いに関連しあうものであるとしている^⑩。土橋氏は「下半の為に従属の地位に立つ」という福井氏の枕詞の定義に問題があるとし、チェンバレン説を批判した福井氏の言及を引用して、「是は中世に至り枕詞の本義を失つて、唯だ古人の用例を踏襲した作ばかりを見て無造作に立てた説に過ぎない」という考えに拠るものとする。そして、枕詞を「意味のない語」というのは、「実質的な意味がない」という意味に解すべきとし、そういう意味の非実質性というのは、中世をまつまでもなく、すでに記紀においても、枕詞の普遍的な属性であったと指摘する(『古代歌謡論』386頁)。本稿においても、「実質的な意味がない」という表現はチェンバレンの言う‘destitute of life’と同一の意味を持つものと考ええる。

土橋氏の「意味の非実質性」についての説明では、まず、用例として「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」(記1)の「八雲立つ」を取り上げ、「この枕詞は何ら現実的・実質的な意味を持たない」が、「この枕詞

に実質的な意味を与えたのが、古事記の説明である」(同書、386頁)という。[※「古事記の説明」とは「其地より雲立ち騰りき」という地の文の場面設定を指す。]そして、枕詞が被枕の上に慣習的・固定的に冠せられるということは、枕詞の意味の非実質性によって始めて可能であると、「慣習的・固定的」と「非実質性」との関わりを説き、「枕詞は、本来実質的な意味をもたない称辞的修飾語である」と定義づけている(同書、387頁)。土橋氏はさらに被枕の性質を指摘し、枕詞の種類をA. 固有名詞に冠する枕詞 B. 普通名詞に冠する枕詞 C. 用言に冠する枕詞の三つに分類する。

その他の枕詞論として、折口信夫氏は「人間に枕ある如く、歌の頭部に据ゑるからの名だと感じたりする類である。歌の生命標となるものなるが故に、歌枕であり、生命標として据ゑられる語なるが為に、枕詞であり、…」^⑫と歌の本質に関わるものと捉え、『常陸国風土記』の「風俗諺曰、筑波岳ニ黒雲挂テつくはわ衣袖漬国是也」^{ころもでヒツチノ}の風俗諺を挙げ、「風俗諺は、神の言ひはじめた詞章の極端壓縮したもの」であるとし、それが分化したものが枕詞や序歌の類であると説く^⑬。歌の起源を神授の言葉とする折口氏らしい理解である。廣岡義隆氏は、折口説を根拠のないものとし、「枕詞の根幹は言語遊戯にある」^⑭と主張し、「衣袖漬つ…常陸(ヒタチ)の国」という類音の懸詞による言語遊戯と見てよい」と反論する。言語遊戯とは、同音・類音の懸詞や繰り返しから、比喩・形容・連想・転用、さらには説明表現まで指しての呼称であるという。

西郷信綱氏が「枕詞の詩学」^⑮において、枕詞が元来オーラルな言語世界のものであったことを証したことも注目値する。「枕詞は、たんにオーラルな律文一般にではなく、特定の韻律単位を有するものに固有な修辭技法であった」とし、「枕と被枕、上の句と下の句とのかかわりをただ辞書的に読むだけではしかたがないこと、その前に飛躍や展開を孕んだ動的な空間が存すること、そしてそれは枕詞が意味的に下句に直結していないのに基づく」と説く。吉本隆明氏は、古代歌謡の表現方法を〈喩〉という概念で捉え、枕詞を暗喩・音便喩・虚喩に分ける。枕詞と受けの言葉の間には、現在ではわからなくなっているが、

何か〈共感〉があり、したがって枕詞自体が共同幻想の象徴になりえると説く¹⁶⁾。古橋信孝氏は、土地についての枕詞は、その土地の伝承にかかわる。つまり、〈共同体〉の象徴として枕詞がある¹⁷⁾とする。次項では『古事記』枕詞の英訳を参照しながらチェンバレンの枕詞への取り組み方を見て行きたいと思うが、チェンバレン後の研究者たちの主張との接点をも考察してみたい。

3. 『古事記』枕詞の英訳

『古事記』中の歌謡は全112首であるが、そのうち枕詞については以下のような状況である。

枕詞 82 (複数の歌謡に歌われている場合あり)
英訳された枕詞 67 (ラテン語訳2件、歌謡により2種類の訳1件を含む)
《参考》地の文中に見られる枕詞 8 (英訳は2件のみ) (名前4、地名2、
献饞の詞1、会話1)

[※歌謡数は日本古典文学大系『古代歌謡集』に拠る。英訳数はKO-JI-KI or “Records of Ancient Matters” (以下KO-JI-KI) における統計である。また、枕詞は現在でも確定できないものがあり、数字は大まかに把握されたい。]

チェンバレンは『古事記』全体においてできる限り原文に忠実に英訳しているが、歌謡でもおおかたその姿勢を崩さない。韻律などにはあまり頓着せずに、原典の文脈に沿った英訳を試みている。歌謡は音仮名表記なので、そこは日本の研究者たちの解釈を参考にしながら彼なりの解釈を行っている。彼が『古事記』歌謡中および散文中の枕詞をどのように英訳したかをリスト《添付リスト参照》にまとめた。リスト中の各々の枕詞に、土橋氏の分類方法—A. 固有名詞に冠する枕詞 B. 普通名詞に冠する枕詞 C. 用言に冠する枕詞—を併せて記しておく(※『古代歌謡論』の分類に拠る)。この被枕による分類は、枕詞の本質に関するいずれの各論にも依拠しない普遍的な分類であると考える。

A) 固有名詞に冠する枕詞：古代の神託が神名・地名を中心とする短詞章であった。讃め詞。呪的・神道的。例) 遠津年魚目目妙姫、木花之佐久夜姫。豊薦

(^{へくろ}平群)、高行くや(準別)。※普通名詞を含む固有名詞も多い。

B) 普通名詞に冠する枕詞：歌謡以外の場ではほとんど用いられない。①称辞的・神道的性格。例) ひさかたの(天)・あらたまの(年) ②美的・描写的称辞。

例) ぬばたまの(夜)・栲綱の(白き腕)

C) 用言に冠する枕詞：神託・諺・口承物語—呪言に発する。例) 『出雲国風土記』『霜葛くるやくるやに』等。一回限りで固定することがない。非固定性・非社会性。

※この分類の場合、懸詞的枕詞や比喩的・類語的枕詞は下位の分類となる。

チェンバレンの枕詞についての脚注は、その解釈をめぐる研究者間で諸説が紛々としている様子を伝えている。「ひさかたの^{あめ}天の香具山」(記27)の「ひさかたの」も解釈をめぐる論争が盛んに行われた枕詞のひとつである。「ひさかたの」は彼の行った枕詞の四分類中の「Ⅱ. 形容詞的または比喩的性質を持つが、本来のもの(原義)が応用され転じて、本来の意味が曖昧になった言葉や句」の用例で紹介されているが、チェンバレンは以下のように述べている。

これは「久堅之(「永続的」と「堅い」)」という文字で書かれるのだが、歌の中で常に「空」(sky)という言葉の前に現れる。天(heaven)に対して当てられる形容語句を形成するには、その文字は十分適切なものと言える。しかし、実際、これらは間違った語源に基づいている。「ひさかたの」ということは、「ひさがたの」と書かれるべきで、ひさごのかたち(the shape of a gourd)の縮約形である。…しかし、まもなく、本来の意味はすっかり忘れられ、現在に至り、「ひさかたの」は枕詞として使われている。天に対してばかりか、天と関連するあらゆる物事どもに対して、つまり、「光」(light)に対してすら、それは、ひさご(瓜)に何も関係がないのである。また、「宮処」(Imperial residence)に対して、それは実に天皇のものとして輝かしいものかもしれないが、カボチャ(pumpkin)の形を倣って建築したわけではないのである¹⁸⁾。

「ひさかたの」の解釈について、チェンバレンは『代匠記』の「天といはん枕詞なり。久しく堅しといふ心なり。」という解釈を退けて、『冠辞考』の「天の形はまろくて虚らなるを、^{ひまこ}匏の内のまろくむなしきに譬て、匏形の天といふならむと覚ゆ」という説を採り、そこから始まる枕詞の変遷に言及している。KO-JI-KI脚注でも、“Gourd-shaped” is the translation of *hisa-kata no* or *hisa-gata no*, the pillow-word for “heaven” と「匏形」が「天」の枕詞であるとコメントしている。 [以上、普通名詞に係る①称辞的・神道の枕詞の例]

チェンバレンが英訳をしなかった枕詞を整理すると以下のようになる。

(1) 一音節を引き起こす (punning¹⁹) 役目を負う枕詞… 畳薦 (→へぐり (平群)

[音韻の類似により固有名詞に係る枕詞]

(2) 枕詞研究者間で解釈が揺らぎ、語義を決定できない枕詞

やつめさす(A)・あをによし(A)・あしひきの(B)・ありぎぬの(A)・ちはやぶる(A)・ちはやひと(A)・そらみつ(A)・水そそく(B)・真木さく(B)・ももしきの(A)・肝向かふ(B)・たまきはる(B)・山たづの(C)

(1) の「畳薦」の場合はその理由が歴然としている。「畳薦」は「^{へぐり}平群」の地名を引き起こす枕詞であるが、『冠辞考』に「畳にせん料の薦を編を隔つといひて、「へ」の一ことに続けたる」とある。KO-JI-KI脚注に、‘tatamikomo, in any case, being a punning one, it cannot be translated.’ と詞合わせの枕詞は翻訳できないと断り書きがしてある。確かに日本語一音節に懸かる枕詞の場合は英語に置き換えても意味が通じないと思われる。1993年に発行された古代歌謡・古典和歌の英訳本である *A Waka Anthology*²⁰ では ‘From woven-mat Mount Heguri’ と訳出しているが、ここではすでにチェンバレンが注意した点は無視されている。

(2) は「山たづの (C) (迎へ)」を除きほとんどが固有名詞や普通名詞に係る枕詞である。「山たづの」は解釈の難しい枕詞で、記88歌謡には「此云山多豆者、今造木者也」と細注がついているが、この注の解釈に齟齬が起こっている。

『厚顔抄』は『袖中抄』の説を受けて「^{モキ}柚人は木を伐り置きて、水の多き時を待ちて河より流して、下に下りてこれを迎へて取れば、迎とはつづくるなるべし」と言い、『記伝』は『厚顔抄』の解釈を物遠しと批判し、『冠辞考』の説を受けて「山^{ヲオノ}斬之、迎の枕詞、斬は刃を此方に向けて用いるので迎とつづく」と記す。KO-JI-KI脚注では ‘The Verb “to meet” (mukahe) is in the original preceded by the Pillow-Word yama-tadzu, …The cause of its use for “meeting” is disputed. It only occurs written phonetically.’ と枕詞「山たづの」の解釈をめぐり論争が起こっていることに言及する。「肝向かふ（心）」や「たまきはる（内）」も英訳するには難しい枕詞である。「肝向かふ」は、『厚顔抄』で「心の枕詞」とされ、『稜威言別』では「肝^{ムカフ}対、心と云^{イハ}ん意の枕詞」とする。

「たまきはる」は、『冠辞考』で「多^{タマ}麻は魂、岐^キ波^{ハル}流は極にて、人の生れしより、ながらふる涯^{カギリ}を遙にかけていふ語」、『稜威言別』では、「魂^{タマ}来^キ経^{ハル}にて現^{キハル}と連^{キハル}く意の枕詞」とする。こうした枕詞の原義のままを英訳するとしたら、歌謡の流れや韻律を壊しかねないというリスクを伴うであろう。

「そらみつ（大和）」は、『代匠記』にすでに「空に見つ」や「饒速日命の故事による」などの説が提示されている。『冠辞考』では「^{ソラミツヤマトノクニ}虚見日本国（神代紀）よりやまとの冠辞」説を唱え、『稜威言別』は「本は蒼^{ソラ}天^{ミツ}満^{ヤマ}山と山に係^{カケ}たる言なりけるが山^{ヤマト}跡と云に続けならひし事。満とは山の満^{ソリ}足て蒼天まで聳^{ソリ}立れるを云」とする^②。チェンバレンはどの説にも拠らず、英訳を行っていない。

チェンバレンは*The Classical Poetry of the Japanese*^②（1880）では万葉集歌や古今集歌等数十首を英訳している。これらの英訳は『古事記』の一語一句を英訳するという方針とは違って、大意を掴んだ上での意識が多い。その中でも従来からの英語表現に比較的合わせやすいと思われる枕詞が、「ぬばたまの」^{たくづの}「^{しろたへ}栲綱の」^{しろたへ}「白妙の」である。

「ぬばたまの（B）（夜）は出でなむ」（記3）

(in the night) [black] as the true jewels of the moor

「ぬばたまの (B) (黒) き御衣を」(記4)

[太字高橋、以下同様]

‘(in my august garments black) as the true jewels of the moor’

「^{たくづの}栲綱の(C)(白)き腕」(記3, 5)(white) as rope of paper-mulberry-bark

「^{しろたへ}白妙の(B)(袖)着備ふ」(記97) ‘fully clad in (a sleeve) of white stuff’

『冠辞考』に「「ぬば玉」は烏扇の実のこと、黒玉、烏玉、野干玉、夜干玉とも書く」と記されており、*KO-JI-KI*では‘the true jewels of the moor’と英訳される。「黒玉」か「野干玉」か、‘true’とした理由はわからないが、漆黒のイメージを持つ枕詞である。万葉集歌では、「ぬばたまの 髪はみだれて」(万9・1800)を‘Dishevelled his raven hair’, 「ぬばたまの 夜は更けにけり」(万13・3281)を‘the hour is late, Dark is the raven night and drear’, 「ぬばたまの 黒髪変り」(万19・4160)を‘The raven locks soon fade’のように、‘night’や‘hair’に「ぬばたまの」を‘raven’ (濡れ羽色の)と表記する^②ことで、漆黒のイメージを歌詞に盛り込んでいる。

「^{たくづの}栲綱の’paper-mulberry-bark’はカジノキのことで、^{たえ}栲はカジノキなどからとった繊維のこと。『冠辞考』に「栲は木綿なる…白き物なれば白き^{タダムキ}臂、白髭といひ…」とある。*The Classical Poetry of the Japanese* (1880)では、「^{たくづの}栲綱の 白鬚の上ゆ」(万20・4408)を‘His snow-white beard adown’と英訳し、「白」に純白のイメージを与えている。「白たへの 衣手干さず 嘆きつつわが泣く涙」(万3・460)の‘Ceaselessly weeping, till my snowy sleeve, Is wet with tears’の‘snowy’も4408番歌の例と同じ。チェンバレンは万葉集歌の場合は枕詞の原義をことさらに訳そうとはせず、慣用的な英語表現を使用して、枕詞の意味合いを盛り込んでいる。「ぬばたまの」^{たくづの}「栲綱の」「白妙の」といった枕詞は、土橋氏が美的・描写的な枕詞と指摘するもので、英語の表現にもこの種の慣用表現を見出すことができ、比較的英訳しやすい枕詞と思われる。

[以上、普通名詞に係る②美的・描写的称辞枕詞]

その他に、『古事記』歌謡では枕詞をそのまま英訳しているが、*The Classical Poetry of the Japanese* (1880)では枕詞についても自由な発想で英訳をして

いるものがある。以下に地名に係る枕詞の例を挙げる。

「おしてるや (A) (難波) (記53) ‘wave-beaten (Naniha)’

「天飛む (B) (軽) 嬢子 (記83,84) ‘Amaiden of heaven-soaring (Karu)’

《参考》「天飛ぶ (鳥) (記85) の ‘The heaven-soaring (birds)’ 》

「隠国こもりくの (A) (泊瀬はつせ) (記89,90) (Hatsuse) the **hidden castle (89)** /
secluded (Hatsuse) (90)

記53歌謡の「おしてるや 難波の崎よ 出で立ちて」は ‘When, having departed from the point of wave-beaten Naniha,’ と「おしてるや (難波)」が ‘wave-beaten’ と語義通りに英訳されている。『冠辞考』の「浪の襲ひ立つ義」の説に対し『記伝』は「おしをおそひの約りたりといはれたるは悪し。ただに押なり」と反論しているが、チェンバレンは『冠辞考』の説を採り、‘wave-beaten’ と英訳している。しかし、「おしてる 難波を過ぎてうちなびく」(万8・1428)では ‘From the loud wave-wash’d shore Wend I my way’ と ‘wave-beaten’ の意味も組み込んだ意識を行っている。

『冠辞考一「天飛むあまた (A)』に「「天飛ぶ」と同義。天を飛ぶ雁といふ意。」とある。「天飛ぶあまと 鳥」(記85)の ‘The heaven-soaring birds’ なら意味が取れるが、「天飛ぶあまと」と同義とされる「天飛むあまた」の「天飛む 軽嬢子」(記83, 84)の英訳が ‘Maiden of heaven-soaring Karu’ (KO-JI-KI) では意味が通らない。「軽」と続く場合について、『鬮枕詞の研究と釈義』では、「天路を飛ぶ雁といふより類音なる軽といふ大和高市郡の地名へ冠らせたるなるべし」(160頁)と説明するが、この類の枕詞は「豊薦の」と同じ類で英訳しても意味が通じない。チェンバレンの『古事記』の英訳は文字通りに英語に置き換えることであるので、(実質的な意味のない) 枕詞を英訳するのだから、意味が通じなくても仕方がないと言ってしまうとそれまでだが、英語の歌謡としての品質が問われるような場合は、そういう訳には行かない。万2・207番歌の泣血哀慟歌では「天飛ぶや 軽の路は 吾妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど」を ‘How

fondly did I yearn to gaze, (For was not there the dear abode, Of her whose love lit up my days?) On Karu's often-trodden road.' と「天飛ぶや」は英訳されていない、'often-trodden' (よく通った) という言葉が追加され、在りし日の妻を思い起こす効果を上げるための意識が行われている。

「^{こもりく}隠国の^{はつせ}泊瀬」は記89歌謡では、'(Hatsuse) the hidden castle'、記90歌謡で 'secluded (Hatsuse)' と英訳されている。脚注では、'*komoriku no hatsuse*, usually interpreted as secluded "Hatsuse," means "the hidden castle," the "final place," tomb.' と泊瀬が人里から離れた土地であり、終焉の地、墓場でもあったと記す。万13・3310、3312番歌の「こもりくの 泊瀬の国に さよばひに」と、「こもりくの 泊瀬小国に よばひせす」ともに 'To Hatsuse's vale I'm come', 'To Hatsuse's vale thou'rt come,' と枕詞「^{こもりく}隠国の」を英訳に入れていない。 [以上、固有名詞-地名に係る枕詞]

最後に用言に係る枕詞の例を挙げる。

「朝日の 笑み栄え来て)」(記3)

'coming radiant (with smiles) like the morning sun'

「^{そにどり}鳩鳥の 青き御衣を)」(記4)

'in my august garments (green) as the kingfisher'

「^{ふな}船餘り い帰り」(記86) の 'make the remaining return voyage'

用言に係る枕詞は「山たづの(迎へ)」を除きほとんどが 'like,' 'as', 'of' などの前置詞を使用して英語に置き換えられている。用言に係る枕詞は被枕との関係が明示的なものが多く、土橋寛氏によると、非固定性・非社会性であるという。こうした枕詞は英訳しやすく、社会性を負った枕詞の場合は被枕との関係が曖昧になってしまう傾向があるようである。記86歌謡の「船餘り (^{ふな}い帰り) は *KO-JI-KI* では「残っている船で戻る」と英訳しているが、*A Waka Anthology* では「船が家の方に引っ張られるように、彼は戻るだろう」と解釈

の違う英訳になっている。

[以上、用言に係る枕詞]

チェンバレンの古事記歌謡の「枕詞」英訳の特徴を挙げると以下ようになる。

1. 語義のわかるものは翻訳する姿勢をとる。

－言葉に即した英訳を試みていて、文脈上の意味合いとして少々無理があっても英訳をしている。

※万葉集歌の場合はあくまでも、歌の内容、韻律を重視し、英訳できる範囲のものを英語に置き換えている。

2. 英訳しない枕詞

－語義について研究者たちの説が固まらず、英訳するのに抵抗があるもの。

－音韻の類似という音声上から派生した枕詞は英語に置き換えることはできない。※英訳しているものもあるが、歌謡としての意味が通らない場合がある。「天飛む(軽)」など。

3. 美的・描写的枕詞の場合は、比較的英語に置き換えやすい。このような詞に比較的合う英語表現があることも理由のひとつと思われる。

「ぬばたまの」^{たくづの}「栲綱の」^{しろたへ}「白妙の」など。

4. 添付リストを見ると一目瞭然であるが、C) 用言に冠する枕詞については、「山^{やま}たづの」を除いてほとんどが英訳されている。例えば「朝日の(笑み)」を‘(smile) like the morning sun’、「^{ソノドリ}鳩鳥の(青き)」が‘(green) as the kingfisher’のようにほとんどが‘like,’ ‘as,’ ‘of’などの前置詞を使用して英語に置き換えられている。「^{みな}船餘り(い帰り)」の‘make the remaining return voyage’のように被枕の英訳に枕詞の意味を盛り込んでいるものもある。用言に係る枕詞は被枕との関係が密のものが多く、英訳しやすいようである。また、「^{たた}鳥つ鳥(B)(鶉)」^{たた}「^{みつぐり}畳なづく(B)(青垣)」^{みつぐり}「三栗の(B)(中)」のような比喩的・類語的枕詞も比較的英訳しやすいようである。言い換えると、これらの枕詞は被枕との関係が比較的明示的であると言える。

以上のことから、枕詞を出来る限り正確に英訳しようとしたチェンバレンの

姿勢が見えてくる。英文歌謡としての品質を問うより、言葉のひとつひとつを正確に伝えようとし、それが枕詞の英訳にも大きく影響している。個々の枕詞の解釈の揺れはチェンバレンにとっては困難の元であったに違いない。ここに、改めてチェンバレンが論文 ‘On the Use of “Pillow-Words” and Plays upon Words in Japanese Poetry’ の中で示した四分類の意味が理解できる。チェンバレンにとって、IIの「形容詞的または比喩的性質を持つが、本来のもの（原義）が応用され転じて、本来の意味が曖昧になった言葉や句。」の範疇に入る枕詞は「ひさかたの」や「天飛ぶ（軽）」のような音韻上から転訛された枕詞が含まれ、英訳の困難なものが多くなる（この分類に入る枕詞が多いと言及する）。IVの「詞の語呂合わせ（掛詞の類）。」といった音韻の繋がりから派生した枕詞を英訳するのは非常に困難である。それらに比べ、Iの「形容詞的または比喩的性質を持ち、音声上の変化を被らず、まだ本来のもの（原義）との関連で使用されている記述用語や記述句。」には美的・描写的な枕詞や用言に係る枕詞、比喩的・類語的枕詞の類が含まれるが、それらの枕詞は比較的英訳しやすい。IIIの「歴史的な事柄や神話上の出来事をほのめかす言葉や句。」には地名に係る枕詞などが組み込まれるが、原義が比較的明瞭なもの、不明なものに分かれ、それによって英訳の難易度も分かれる。このように見ると、チェンバレン自身も「我々外国人にとってわかりやすい」と述べているが、この四分類は英訳する立場からの分類で、枕詞の分類方法の一つである。もちろん日本の枕詞研究者たちの枕詞の本質や性格といった分類と比較すると、細部に差異が生じてくる。

まとめ

KO-JI-KI or “Records of Ancient Matters” (1882) の序 (“Introduction”) の「翻訳の方法の事」でチェンバレンは「本文中の歌においては解釈かたきふし甚多く頗難語あり」と述べているが、その脚注での歌謡についての説明は大量に及び、歌謡の解釈に心血を注いだ様子が窺える。同時に「枕詞」の解釈にも正面から取り組んでいる。そうした『古事記』歌謡に対する姿勢や万葉集歌

の翻訳を見る限り、チェンバレンが枕詞を「意義なき詞」(『枕詞の研究と釈義序言)と捉えていたとは到底考えられない。実際は、論文‘On the Use of “Pillow-Words” and Plays upon Words in Japanese Poetry’中で記しているとおり、彼は枕詞を「それ自身実体のない詞 (it is a word, itself destitute of life)」、つまり、土橋寛氏による「実質的な意味がない」詞と捉えていたということであろう。

また、チェンバレンは『古事記』の枕詞を語義通りに英訳しようとしたが、実際は枕詞の英訳はそのように簡単には行かない面もある。歌謡の翻訳にとって一番重要なことは、元の歌謡の内容や味わいを損なわずに翻訳することで、そうした場合には枕詞は、時には他の形で表現されることも、切り捨てられることもあるだろう。チェンバレンは*The Classical Poetry of the Japanese* (1880)でそれを実践しているが、そうした翻訳には訳者の感性も関係し、非常に難しい作業になる。論文‘On the Use of “Pillow-Words” and Plays upon Words in Japanese Poetry’の末尾で以下のように述べている。

日本の古典詩歌への注意深い研究、それゆえ、もちろんのこと、その型を決定する作詩法の研究が、詩文学すべての中で最も輝かしいもの、つまり讚美歌の、その日本語訳を成功させるために、先行しなければならない。少なくとも、私はこのような主題に意見を述べることに最も資格のある、日本語を第一言語とする人々を見て確信するのだが、万葉集の長歌の作風にある韻律の型がまさに日本人の耳に心地よく聞こえる事である。そのような翻訳にはさまざまな困難があり、元の歌謡の精神を生かすために、しばしば文字表現を犠牲にせざるをえない(意識という手段を使う)ことは疑いようもない。同時に、根気よく忍耐強く研究することが、望ましい結果を可能にするであろう。^④

[下線高橋]

歌謡に韻律があること、そしてその韻律は英語や中国の詩における韻やアクセントの強弱とは全く違う性質のものであることには気づいていたが、その趣

を直に感じることは出来ず、外国人としての限界を感じていたのかもしれない。

チェンバレンは『古事記』の枕詞の英訳では、枕詞と被枕の関係をあくまでも文脈上との係りから捉えて英訳を行おうとしたが、韻律が歌謡の主要な役割を持つことに気づいていたのであろう。西郷信綱氏は、枕詞が元来オーラルな言語世界のものであったことを指摘するが、「枕詞は、たんにオーラルな律文一般にではなく、特定の韻律単位を有するものに固有な修辞技法であった」（「枕詞の詩学」と述べ、「枕と被枕、上の句と下の句とのかかわりをただ辞書的に読むだけではしかたがないこと、その前に飛躍や展開を孕んだ動的な空間が存すること、そしてそれは枕詞が意味的に下句に直結していないのに基づく」と説いたことが思い起こされる。チェンバレンはそこまで厳密に分析していたわけではなく、英訳を通して韻律の重要性を感じとったと思われる。

当時の社会情勢、枕詞研究の状況の下でチェンバレンが行ったことは、やはり我々日本文学を志す者にとって貴重な教訓を与える。当時の日本の枕詞研究の実態を享受しつつ、枕詞を理解しようとしたことはもちろん、論文中では、西洋の聖典である詩篇の日本語訳を成功させるためには、まず日本の詩歌の作詩法を研究しなければならないと説く²⁸。今後も日本の歌謡や和歌は翻訳されて行くと思うが、そうした時に、和歌の修辞法である枕詞や序詞をどう訳すかという問題が必ず起こると思う。その先駆者としてチェンバレンは、「其言詞を飾るまでにて戯^レれに似たるもあり」との自身の言葉とは裏腹に、和歌の、あるいは日本精神の神髄に関わるものとして枕詞を実感しようと努めていたのである。

『古事記』枕詞の英訳リスト (KO-JI-KI or “Records of Ancient Matters” に拠る。)

枕詞(歌番号)	被語句	英訳	
A)八雲立つ(1)	出雲八重垣	Eight clouds arise. (The eightfold fence of Idumo…)	<Note>
B)さ野つ鳥(2)	雉	the true bird of the moor, (the pheasant)	
B)庭つ鳥(2)	鶏	The bird of the yard, (the cock)	
A)(遠遠し)(2)	高志	in the far off (Land of Koshi)	
B)萎え草の(3)	女	(a maiden) like a drooping plant	
B)ぬばたまの(3)(4)	夜、黒	(in the night) [black as] the true jewels of the moor	
C)朝日の(3)	笑み	(smiles) like the morning sun	
C)栲綱の(3)(5)	白き	(white) as rope of paper-mulberry-bark	
B)沫雪の(3)(5)	若やる胸	(breast soft) as the melting snow	
B)沖つ鳥(4)(8)	胸見る/鴨	like the birds of the offspring. (look at my breast)	
C)辺つ波(4)	背に脱ぎ棄て	on the waves on the beach	
C)鷓鴣の(4)	青き	(green) as the kingfisher	
C)群鳥の(4)	我が群れ往なば	(if) like the flocking birds, (I flock and depart)	
C)引け鳥の(4)	我が引け往なば	(if) like the led bird, (I am led away and depart)	
B)朝雨の(4)	霧	(the mist) of the morning shower	<Note>
B)若草の(4)	妻の命	(Thine Augustness [my] spouse) like the young herb	<Note>
B)(白玉の)(7)	君	([my] lord[who is])like unto white jewels	
B)いすくはし(9)	鯨	A valiant (whale)	<Note>
C)(立椀稜の)(9)	実(身)の無けく	(Slice off a little)like the berries of the standing soba	
C)(いぢさかき)(9)	実(身)の多けく	(Slice off a quantity)like the berries of the vigorous sasaki	
A)みつみつし(10)(11)(12)	久米	augustly powerful warriors ※久米を訳さず。	<Note>
A)神風の(13)	伊勢	(Sea of Ise) [on which blows]the divine wind	
A)楯並めて(14)	伊那佐	(As we fight)placing our shields in a row, (going…on Mount Inasa)	
		※歌詞の中に枕詞を組み込んでいる。	
B)鳥つ鳥(14)	鸕	(cormorants), the birds of the island	
A)やつめさす(23)	出雲健	*英訳せず*(Idumo bravo)	
*A)さねさし(24)	相模	(Sagamu), where the true peak pierces	<Note>
A)にひばり(25)	筑波	passing Nihibari and Tsukuba ※地名として解釈。	<Note>
B)ひさかたの(27)	天	*ラテン語訳* (‘heaven’)	<Note>
B)あらたまの(28)	年、月	*ラテン語訳* (‘year’ ‘moon’)	<Note>
B)畳なづく(30)	青垣	(Awogaki) encompassing it with its folds	
A)畳鷹(31)(91)	平群	*英訳せず* (from Mount Heguri)	<Note>
C)鳩鳥の(38)	潜き	(plunge) like the grebe (into the Sea of Afumi)	
A)石立たす(39)	少名御神	(The Small August Deity) who dwells eternally, firmly standing	
A)千葉の(41)	葛野	(the Moor of Kazdu) in Chiba ※地名。	
B)百伝ふ(42)	角鹿	far-distant (Tsunuga)	<Note>
(111)	鐘ゆらくも	the far-distant (bell tinkles)	
C)鳩鳥の(42)	潜き息づき	(plunging & breathless) like the grebe	

A) 階だゆふ(42)	しな 楽浪道を	the up and down(road by the wavelets)	
B) 三栗の(42)(43)	みつくり 中つ土/中つ枝	(The middle earth/branch) like three chestnuts	<Note>
B) (香ぐはし)(42)	花橘	The fragrant flowering (orange-tree)	
B) (ほつもり)(43)	赤ら嬢子	*英訳せず* (the ruddy maiden)	
*B) 水たまる(44)	池	(Lake Yosami) where the water collects	
A) 道の後(45)(46)	しり こはだ 古波陀	(Kohada) in the back of the road	
*B) 冬木の(47)	すから 素幹	(chilly like the trees beneath, the trunks)of the winter trees	
(ふゆきのす(47) 枯かした木の)			
B) ちはやぶる(50)	宇治の渡に	*英訳せず* (the Uji ferry)	<Note>
B) ちはやひと(51)	宇治の渡に	*英訳せず* (the ferry bank of Uji)	
B) くらぎやの(52)	まさづ子(?)	(Masadzuko) of Kurozaki ※地名と捉えていたか。	<Note>
A) おしてるや(53)	難波	wave- beaten(Naniha)	
*B) 隠処の(56)	こもりづ (隠水の)下	(from beneath) like hidden water	<Note>
A) つぎねふや(57)(58)	山城	(Yamashiro) where the seedlings grow in succession	<Note>
A) あをによし(58)	奈良	*英訳せず* (I pass Nara.)	
A) 小楯(58)	大和	(Yamato) with its shield of mountains	<Note>
B) 肝向かふ(60)	心	*英訳せず*(Heart) that is in the moor of Ohowiko	<Note>
B) つぎねふ(61)(63)	山城	(Yamashiro) where the seedlings grow in succession	
*C) 根白の(61)	白腕	(thy white arm) like the whiteness of the roots	<Note>
A) 高行くや(67)(68)	隼別	High-going(Falcon Lord)	
A) 梯立の(69)(70)	倉橋山	Ladder-like (Mount Kurahashi)	
*B) たまきはる(71)	内	*英訳せず*(Court Noble of Uchi)	<Note>
A) そらみつ(71)(72)(97) 大和		*英訳せず* (in the land of Yamato)	<Note>
A) 高光る(28)(72)(100)			
(101)(102)	旦の御子	(August Child) of the High shining Sun	
C) (かざろひの)(76)	燃ゆる	(The group of houses) sparkingly(burning,)	<Note>
B) あしひきの(78)	山	*英訳せず* (on the mountain)	<Note>
C) 刈薦の(80)	乱れ	(The disorder) of the cut <i>Hydropyrum latifolium</i>	<Note>
A) 天飛む(83)(84)	軽	heaven-soaring (Karu)	
B) 天飛ぶ(85)	鳥	heaven-soaring (birds)	
*C) 船餘り(86)	い帰り	make the remaining return voyage	
		※被枕の解釈に枕の意味を組み込んでいる。	<Note>
A) 夏草の(87)	あひね 阿比泥	(The shore of Ahine) with its summer herbs	
C) 山たづの(88)	迎へ	*英訳せず*(I will go, oh! to meet thee.)	<Note>
A) 隠国の(89)(90)	はつせ 泊瀬	(Hatsuse) the hidden castle(89)	
		secluded (Hatsuse) (90)	<Note>
C) 櫛弓の(89)	臥やる	(prostrate) like a tsuki bow	<Note>
C) 梓弓(89)	立てる	(standing) Like an adzusa bow	<Note>
A) やすみしし(97)		(Our Great Lord), who tranquilly carries on the government	
(28)(98)(104)	我が大君		

- B) 白妙しろたへの(97) 袖 (a sleeve) of white stuff
 *B) 八百土やほじよし(100) 宮 (A palace) pestled with hundred [load of]earth
 (八百丹よし)
 B) 真木まき栄さかく(100) 日、檜 *英訳せず*(the august gate [made of]chamaesparis [wood] <Note>
 *A) ありぎぬありぎぬの(100) 三重みやへの子 *英訳せず*(the maid of Mihe) <Note>
 B) 百足ももだる(100) 槻 the hundred-fold flourishing (tsuki-tree)
 A) ももしきのももしき(百磯城ももしきの)(102) 大宮人 *英訳せず*(The people of the great palace) <Note>
 C) 鶉うづらとり鳥(102) 領布ひれ取り掛けて (having put on scarfs) like the quail-birds <Note>
 C) 鶺鴒きりぎりす(102) 尾行き合へ (having put their tails together) like wagtails*
 C) 庭雀うづすずめ(102) 蹲まり居て (and congregated together) like the yard-sparrows
 B) 水そそく(103) 臣 *英訳せず*(Oh! the grandee's daughter)
 涙海なみの少女 <Note>
 A) 大魚おおをよし(110) 鮪しひ The great fish!... (tunny spearing fisherman!)
 B) 比比羅木ひひらぎ之其花麻豆美神(「大国主神の神裔」)
 The Deity waiting-to-See-the-Flowers-of-the-Holly <Note>
 B) 天知あめちか迦流美豆比賣 (「大年神の神裔」) Princess Ame-shiru-karu-midzu <Note>
 B) 僕は百足ももだらず八十垺やそくま手に隠りて(「大国主神の国譲り」)
 I will hide in (the eighty) less than a hundred road-windings <Note>
 C) 打竹きたけのとをををををに(天之眞魚昨を獻す)(「大国主神の国譲り」) ※献饒の詞
 I will offer up the heavenly true fish-food so that the split bamboos(bend). < Note>
 A) さくくしろ 五十鈴(天孫降臨) at the temple of Isuzu <Note>
 C) 青雲あめの 白肩津(神武東征) brought up at the haven of Shirakata ※「青雲の」英訳していない。
 B) 遠津とほつ年魚目あめめ比ひ實め(「崇神天皇系譜」) Tohotsu-no-ayu-me-me-kuhushi <Note>
 C) 千千都久ちぢ和比買命(崇神天皇系譜) Princess Chiji-tsuku-yamato <Note>

※A. 固有名詞に冠する枕詞 B. 普通名詞に冠する枕詞 C. 用言に冠する枕詞(※土橋寛『古代歌謡論』の分類に拠る。*の付く不明なものは同書でも不明、または、同書に記述されていないもの。)

リスト中、枕詞名が()で括られているものは、チェンバレンが枕詞と認識していなかったと思われるもの。

<Note>は脚注があるもの。 ※以下は筆者のコメント。

【注】

- ①・・・But even although a Makura-Kotoba may be sufficiently apt if it is rightly applied, some Japanese poets take a perverse pleasure in wresting it from its proper sense in a way which to us is nothing short of ludicrous. (*A History of Japanese Literature* by W.G.Aston, 1898)
- ②チェンバレンの経歴に関する情報は、重久篤太郎(『日本近世英学史』「王堂 チェンバレン略傳」教育図書(株)1941年10月)に拠る。
- ③ [原文]With the Songs embedded in the prose text the case is different, as some of them are among the most difficult things in the language,・・・and those Pillow-Words which are founded on a jeu-de-mots or are of doubtful signification form, with the one exception mentioned below, the only case

where anything contained in the original is omitted from the English version.

- ④ 福井久蔵著作・山岸徳平補訂『飄枕詞の研究と釈義』有精堂出版、1960、1977年6月、33頁。
- ⑤ [原文]Its name indicates tolerably clearly its meaning: it is a word, itself destitute of life, on which the succeeding significant word, as it were, rests its head. The term Kamuri-Kotoba, i.e. "hat-word," which is preferred to that of "Pillow-Word" by the great scholar Mabuchi, sets forth the nature of this class of expressions in an equally intelligible manner.
- ⑥ チェンバレンはその理由として「昔は、勇敢で勇氣あるもの以外は軍隊 (hosts) の指導者に選ばたものはいなかった。キリスト教の恩寵と高潔さに満ちているとみなされるもの以外でローマ法皇の座に掲げられたものはいない。」と説明する。
- ⑦ 「そもそも冠り辞の品々なるところをかつがつあげていはんに、①ひさかたのあめは象をたとへ、②そらみつやまとはゆゑをいひ、③ちはや夫 (ふ) の神は性 (さが) をあげ、④たちねのは、はもとをたとへ、⑤弱草 (わかくさ) のつまはたぐひをなん引ける、…」(賀茂真淵『冠辞考』序)
- ⑧ 論文中に、「ももたらず」(文字上では、「百足らず」)は「やそ (八十の古語)」や、「いそ (五十の古語)」の省略と考えられている、「い」の音節で始まる場所の句や名前として同様に使用される」と説明されている。
- ⑨ 論文中に、「かむかぜの」は、第一には神話の話から、次に掛詞の点から、伊勢の国の名との関連を負う」とある。《『神風の息』のイから伊勢に係る(『冠辞考』)》
- ⑩ 福井氏の指摘する論文中の 'destitute' は、'abandoned,' 'forsaken' (見捨てられた、放棄された)や 'deprived or bereft of (something formerly possessed)' ((以前は所有していたものが奪われた) という意味で、必ずしも「意味のない」ことではない (Oxford English Dictionary)。ただ、チェンバレンは万葉集の歌を英訳した *The Classical Poetry for Japanese* の序文では、枕詞を 'meaningless expression' と述べているので、この時点で 'meaningless' の解釈に対する問題は残る。
- ⑪ 土橋寛『古代歌謡論』三一書房、1960年11月、378～398頁。
なお、用法の固定性・社会性については、「枕詞」は記紀・風土記の時代から、一般には「昔から言い習わされた語」という意味での「諺」の一種として理解され、和歌の世界では、平安朝末期にすでに「定まりて続けてよむ」習わし、つまり枕詞と被枕との固定性・社会性が明確に自覚されている」と説明する(同書、385頁)。
- ⑫ 折口信夫「日本文学の発生 序説」1974年(『折口信夫全集』第七巻、192頁)。
- ⑬ 折口前掲書(注12) 40～42頁。
- ⑭ 廣岡義隆『上代言語動態論』塙書房、2005年11月、355頁。
- ⑮ 西郷信綱「枕詞の詩学」(『文学』1985.2 Vol.53/『古代の声』朝日新聞社、1985年)。
- ⑯ 吉本隆明『初期歌謡論』(III. 枕詞論) 河出書房新社、1977年6月。
- ⑰ 古橋信孝『万葉集を読みなおす 神謡から'うた'へ』日本放送出版協会、1985、1987年2月。136～146頁。
- ⑱ [原文] the "pillow-word" hisakata no, written with the characters 久堅之 (enduring and hard), and constantly found in poetry before the word "sky." The characters seem appropriate enough to form an epithet to be applied to the heavens; but, as a matter of fact, they rest on a mistaken etymology. The word hisakata should be written *hisagata*, and is a contraction of *hisago no katachi* (the shape of a gourd), … Soon, however, the original meaning was so completely forgotten, that, down to the present day, *hisakata no* is used as a "pillow-word," not only for the heavens, but for a whole number of things connected with the heavens, – even for the light, a phenomenon which has certainly no connection with a gourd, and for the Imperial residence, which may, indeed have been heavenly in its splendour, but is hardly likely to have been built after the pattern of a pumpkin.
- ⑲ チェンバレンは、*KO-JI-KI* or "*Records of Ancient Matters*" (1882) の序 ('Introduction') の「翻訳の方

法の事」で「枕詞」について、‘those Pillow-Words which are founded on a jeu-de-mots or’ と記しているが、『英訳古事記』でこれを「この枕詞の如きは其言詞を飾るまでにて戯ふれに似たるもありて」と日本語訳をしている。‘a jeu-de-mots’の意味は「言葉遊び」「語呂合わせ」「しゃれ」である。

- ②① *A Waka Anthology Vol. One: The Gem-Glistening Cup* by E.A. Cranston, Stanford University Press, 1993 (『風土記』『古事記』『日本書紀』『万葉集』～『新古今集』等十二種の古代歌謡や古典和歌集を英訳した書籍。)
- ②② *A Waka Anthology* では「そらみつ (大和)」を ‘In the land of sky-seen Yamato’ と英訳し、「空に見つ」説を採っている。また、「たまきはる (内)」は ‘My elder brother, Of gem-cutting Uchi’ と訳している。‘gem-cutting Uchi’ の場合、枕詞英訳の難しさを痛感する。
- ②③ チェンバレンは *The Classical Poetry of the Japanese* の ‘Introduction’ でも、‘The Pillow-words’ are meaningless expressions which are prefixed to other words merely for the sake of euphony.’ と述べている。この文章を川村ハツ江氏は『日本人の古典詩歌』(1987年)の中で「『枕詞』は修辞法のひとつで、頭韻とも言われる。直接の意味は失っているが、ある一定の語に冠して語調を整え快い音調を作り出すために用いられる」と日本語訳し、‘meaningless’を「直接の意味は失っている」と訳出している。
- ②④ ‘raven’ ‘A large black crow’ の意味だが、‘regarded as a symbol of providence …but commonly as a bird of ill omen, foreboding death’ とある (*Oxford English Dictionary*)。つまり、不吉な象徴とされたということであるが、チェンバレンはこれを意識していたのであろうか。たまたまかもしれないが、1800は行路死人歌、3281は相聞だが、我が背子が来ないという歌。4160は世間の無常を悲しぶる歌で、内容としては暗い歌ばかりである。
- ②⑤ [原文] A careful study of the ancient poetry of Japan, and therefore, of course, of the prosody which determines its outward form, must precede any successful attempt at a translation into Japanese of the most splendid of all poetical literatures, – the Hebrew Psalms. At least, I am assured by some of those natives best qualified to form an opinion on such a subject, that a metrical version in the manner of the longer odes of the Manyōshū would alone be satisfactory to Japanese ears. Of the difficulties attending such a translation, and of the necessity which would often occur of sacrificing the letter to the spirit, there can be no doubt. At the same time, patient and persevering study should render the desired end not impossible of attainment.
- ②⑥ 詩篇は旧約聖書に収められた150篇の神への讚美の詩。歌唱を伴うものを讚美歌という。当時、讚美歌の日本語訳が盛んに行われた。

《参考文献》

- 契沖『萬葉代匠記』1687-1690年『契沖全集』第一～七卷)
- 契沖『厚顔抄』1691年(『契沖全集』第七卷)
- 賀茂真淵『冠辞考』1757年(『賀茂真淵全集』第八卷)
- 本居宣長『古事記伝』(1790～1822年) / 『玉勝間』八の巻(1795～1810年頃)(『本居宣長全集』)
- 橋守部『稜威言別』1847年(『橋守部全集』第三)
- 藤原雅澄『枕詞解』1839年(『万葉集古義』所収)
- 重久篤太郎『日本近世英学史』(『王堂チェンバレン略傳』)教育図書(株)、1941年10月
- 福井久蔵著作・山岸徳平補訂『新訂増補枕詞の研究と釈義』有精堂出版、1960、1977年6月
- 土橋寛『古代歌謡論』三一書房、1960年11月
- 折口信夫「日本文学の発生 序説」1974年(『折口信夫全集』第七卷)
- 吉本隆明『初期歌謡論』河出書房新社、1977年6月
- 西郷信綱「枕詞の詩学」(『文学』1985年2月 Vol.53/『古代の声』朝日新聞社、1985年)
- 古橋信孝『万葉集を読みなおす 神謡から‘うた’へ』日本放送出版協会、1985、1987年2月

廣岡義隆『上代言語動態論』塙書房、2005年11月

The Classical Poetry of the Japanese by B.H.Chamberlain, 1880

A Waka Anthology Vol.One: The Gem-Glistening Cup by E.A.Cranston, Stanford University Press,1993

* 討論要旨

金中氏は、枕詞の翻訳は和歌全体の翻訳とも密接に関わることを指摘し、散文・韻文の別や英詩としてのアクセントの取り扱いなど、枕詞を含むチェンバレンの和歌全体の翻訳のスタイルについて質問した。発表者は、『万葉集』の翻訳では歌全体の流れの中で枕詞の訳出の必要性を判断していたのに対して、『古事記』の翻訳では歌の流れが第一義ではなく、枕詞自体の英訳が第一主眼であったと回答した。また、チェンバレン自身も枕詞の翻訳を歌の流れ全体の中に組み込む必要性を感じていたことを補足した。

次にツベタナ・クリステワ氏は、枕詞に対するチェンバレンのアプローチが当時の日本の国文学者たちの枕詞に対する見解とどう関連づけられるか、エドウィン・克蘭ストンやリービ秀雄の翻訳にチェンバレンの翻訳の反映が見られるかなど、和歌研究および翻訳の伝統に与えたチェンバレンの影響について質問した。発表者は、チェンバレンの翻訳の影響はその後の *a waka Anthology* の中に脈々と続いていると述べた上で、チェンバレンが枕詞を字面で訳すのではなく、日本人にとっての意味を感じ取って英訳したことを評価したいと回答した。

クリステワ氏は、二十世紀後半に行われていた数多くの和歌の翻訳、あるいは枕詞の翻訳の中でチェンバレンの翻訳の影響をどう位置づけられるかという広がりがこの研究には必要ではないかと改めて指摘した。発表者は、1969年に『古事記』を翻訳したフィリップパイがチェンバレンの翻訳を見ていると応答した。